

風はタンポポを じばいしたいんだよ



たけの子は地域にある園ではないので、保護者の方が「わざわざ」選ばないとお子さんを入れないところ。縁とは不思議なもので、たけの子に登園しているひとりひとりの子どもたちとも不思議な縁で結ばれています。

今回は、そんな不思議な縁がコロナ禍でつながった、ふたりの園児のことをお話ししたいと思います。

◆春節で帰国したまま帰れなくなったけんつくくん
ひとり目は、中国で働いている両親が春節で帰国したまま、帰れなくなった4月で3歳になったけんつくくんのことです。

最初は神奈川の自宅近くの園に預けたそうですが、まったく慣れなかったとのこと。それで、ご主人のご実家のある米沢で園を探したところ、たけの子を知り、ご両親と一緒に見学に来て、けんつくくんの様子を見たら大丈夫そうだったので、通わせることになったのです。

最初は表情も硬く、「アンパンマン」と「バイキンマン」しか言えなかったけんつくくんですが、なるべく禁止をせずに、やりたいことをやらせるように見守りしました。保育室の棚によじ登ったこともあったけれど、きつと「自分はどこまでできるのか」に挑戦しているのだなと思って、いつ落ちてもいいように後ろに立ち、その挑戦を支えました。

自分の意に添わない環境に置かれたら、誰だって自分を守るために殻を閉じ、時に攻撃的になってしまふのではないのでしょうか。

在園児と時にぶつかりながらも、次第にたけの子に

慣れていったけんつくくんは、大きな転機がきたのは、同じ中国からの一時帰国児、しおちゃんとの出会いでした。

◆初めは絵を描くのが好きなおとなしい子

4月から入園したしおちゃんは、おとなしい落ち着いた子という印象でした。ご飯もちゃんと自分で食べるし、デザートは最後に食べるというおりこうさん。にじみ絵をさせたら、気に入って何枚も何枚も集中して描ける、そんな子でした。(過去形なのですが) そのしおちゃんが、けんつくくんと仲良しになったのです。同じ中国からの帰国者ということで、本人同士にしか通じない、わたしたちには謎の言葉があるようで、地面の何かをさしてけんつくくんが言ったその言葉を聞いて、「そうだよ」としおちゃん笑って言うてから、ふたりは急速に仲よしになっていきました。

それからのしおちゃんの口ぐせは「けんつくつたらけんつくくんがするいたずらを優しく許す、そんな優しい言葉です。」

◆いたずらっこのふたり

今ではしおちゃんはけんつくくに負けないぐらいのいたずらっこで、わざとおもちやをとちらかしてみたり、ホースで水をかけたり、そのホースも奪い合おうし、ご飯はひとりりで食べないし、デザートは先に食べちゃうし……。とつても3歳らしくなりました。わたしはそんなしおちゃんを「ワルジオ」と呼んでいるのですが、もちろん、愛称です。

お父さんと離れて暮らすしおちゃん。お母さんにたっぷり甘えたくても、妹が生まれたばかりで中々甘えられないしおちゃん。だから、少々悪くたっていい、わがままだっていい。そんなしおちゃんを丸ごと

愛しています。

けんつくくんはこのごろ言葉の数が増えて二語文も出るようになり、よく笑い、大人とも身体を使って触れ合えるようになってきました。いたずらも大分減ったようです。今のマイブームは裸ん坊。しよっちゆう脱いでます。

◆どんな行動も判断抜きに受け入れる

もう、10年以上も前になりますが、福島大学の大宮勇雄先生からニュージージーランドの幼児カリキュラム『テ・ファリキ』について学んだことがあります。この考え方がわたしの保育に対する考え方の大きな裏付けとなりました。『テ・ファリキ』についてはまた機会があれば、書いてみようと思います。その中の所属間についての合致する経験の事例として「どんな行動も判断抜きに受け入れられる」とあります。

◆子どもは詩人

子どもたちと館山を登り、御成山公園でお昼ご飯を食べていた時、風が吹いてきてとても気持ちよかったです。山を登って開けた場所で眼下に米沢市内をながめながらご飯を食べるのは格別でした。そんな気持ちから「風がふいてるね」とわたしが言ったら、しおちゃんは「風はタンポポをそばしたいんだよ」と言ったのです。しおちゃんの目には風にはとばされる綿毛が映っていたのでしょうか。

風を感じる心。人にだけでなく、生き物すべてに関わる風、自然、それを感じる感性をしおちゃんは確かに育んでいるのだなと感じました。

その感性がいつの日か、しおちゃんやけんつくくん、そしてたけの子に通うすべての子が自然界、社会的な世界、身体世界、物質世界の意味を知るための自分なりの理論の基になっていくことでしよう。